

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈著書紹介〉 パルデシ  
プラシヤント, 桐生和幸, ナロック ハイコ  
編 『有対動詞の通言語的研究—日本語と諸言語の  
対照から見えてくるもの』

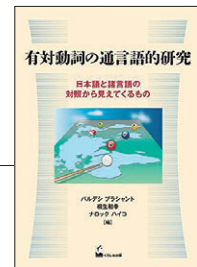
メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: パルデシ, プラシヤント メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000834">https://doi.org/10.15084/00000834</a>

バルデシ プラシャント, 桐生和幸, ナロック ハイコ 編

『有対動詞の通言語的研究  
—日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』

2015年12月 くろしお出版 A5判 v+479ページ 4,600円+税

プラシャント・バルデシ



日本語にはいわゆる有対自他動詞が豊富にあり、動詞の形態に標示される他動性は、古くから盛んに研究されてきた。また、言語類型論の分野でも、有対自他動詞の形式的な関係における通言語的な普遍性と多様性を探求する研究が70年代から盛んに行われている。本論文集に収録されている論文の多くは世界諸言語の動詞に反映される他動性について論じ、日本語との対照を行い、有対自他動詞の形式的な関係の類型論で提案されている①全世界的に他動化型（つまり、自動詞に標識を付けて他動詞を作る）優勢説および②頻度説（音韻的な長さ（文節音素の数）が短い動詞のほうが使用頻度が高い）が妥当であることを明らかにしている。世界の多くの言語と同様、日本語においても、①と②に合致することが確認された。

本論文集は、筆頭編者のバルデシがリーダーを務める国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」の言語類型論チームの研究成果の一部をまとめたものである。本論文集には、26編の論文に加えて、編者共同執筆による全体を俯瞰した序論、そして巻末にナロック・バルデシ・影山・赤瀬川が作成した「現代[日本]語自他对一覧表」を付録として掲載している。また、事項索引、人名索引、言語索引も附している。

26編の論文は東アジア・北東アジア・中央アジア（第1部）、東南アジア・南アジア（第2部）、アフリカ・ヨーロッパ（第3部）の順で掲載されている。各論文およびその執筆者は下記の通りである。

序論 ハイコ・ナロック, プラシャント・バルデシ, 桐生和幸

第1部 東アジア・北東アジア・中央アジア

日本語自他動詞対のコード化の頻度論的動機付け：大規模コーパスによる検証

ナロック・ハイコ, バルデシ・プラシャント, 赤瀬川史朗

「見つかる／つかまる」クラス述語の他動性 岸本秀樹

日本語族における他動性交替の地域差 佐々木冠, 當山奈那

コリヤーク語のS=A交替における格枠組みと被動作性 呉人恵

ツングース諸語の自他について 風間伸次郎

韓国語の語彙的自他交替：接辞 -i/hi/li/ki- による派生の双方向性 円山拓子

モンゴル語の身体部位運動を表す文に見られる動詞の形態 梅谷博之

- ギャロン語ヨチ方言の他動性：自他動詞対からの分析 白井聡子  
 現代ウイグル語の他動性について：形態的派生の方向性と意図性の観点から  
 新田志穂, 栗林 裕  
 チュルク語の自他交替の方向性：交替タイプの変異と安定性 大崎紀子
- 第2部 東南アジア・南アジア
- ラマホロット語の自他交替 長屋尚典  
 タイ語の Freeze 事象表現：コーパスを使った事例研究 高橋清子  
 ラワン語の自他動詞：形態的対応と事象のコード化の面からの考察 大西秀幸  
 メチェ語の使役動詞の形態的特徴 桐生和幸  
 ネワール語における自他動詞対：民話テキストの動詞分類と考察 松瀬育子  
 日本語を通してみたヒンディー語の語彙的・統語的他動性：  
 複合述語 N/A+kar-naa「する」に焦点をあてて 西岡美樹  
 ヒンディー・ウルドゥー語の語彙的自他対における有標性の役割  
 ピーター・エドウィン・フック  
 スィンディー語の動詞派生：受動動詞が表すもの 萬宮健策  
 ブルシャスキー語の動詞語幹と他動性 吉岡 乾
- 第3部 アフリカ・ヨーロッパ
- トーロ語における自他動詞の交替 梶 茂樹  
 スワヒリ語における有対動詞：派生の形式と動詞の意味を中心に 米田信子  
 リトアニア語の自他交替：反使役を中心に 櫻井映子  
 ハンガリー語の自他動詞と項構造 江口清子  
 コーパスから見たハンガリー語の自他動詞 大島 一  
 アイスランド語の衣類の着脱表現 入江浩司
- 付録 現代語自他対一覧表  
 ナロック・ハイコ, パルデンシ・ブラシャント, 影山太郎, 赤瀬川史朗

フックの論文を除くすべての論文はプロジェクトの研究発表会や日本言語学会におけるワークショップの発表に加筆・修正を加え、充実させたものである。また、各論文は、すべて編集者1人とピア1人、あわせて2人による厳正な査読を経ている。

巻末に附した「現代語自他対一覧表」は、既存の日本語自他動詞対のリストの内容を批判的に検討した上で統合し、さらにそれらのリストになかった対を追加して、最新・最大の日本語動詞対のリストを提供することを目指して作成したものである。「現代語自他対一覧表」に含まれている各動詞の使用頻度に関しては、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス DVD 版 (2011)』の文字ベース XML (約1億短単位) を MeCab+IPA 辞書で形態素解析し、その結果を表記ごとにレマ化した頻度を使用している。また、書籍版では収録できなかったローマ字表記、英訳、活用など、すべての情報を含んだ Excel 版の「現代語自他対一覧表」を以下のサイト (<http://watp.ninjal.ac.jp/resources/>) からダウンロード可能となっ

ている。

本書では東アジア・北東アジア・中央アジア・東南アジア・南アジア、アフリカ・ヨーロッパの代表と考えられる言語が研究対象となっている。これらの言語を扱った論文からは、特定の地域間や語族の派生パターン・派生の方向のバリエーションおよび自他交替の方向性の歴史的な変異と安定性、言語類型論で近年活発に議論されている派生パターン・派生の方向の動機づけの説明の最前線、自他動詞における異なる格枠組みの記述および動機づけ、他動性と意図性、アスペクトやヴォイスなどとの関わりが浮き彫りになる。

本書の刊行を契機として、日本語の有対動詞の研究の知見が世界の有対動詞の研究に貢献し、また、世界の言語の有対動詞の研究から日本語の有対動詞の研究に新たな知見が得られることを期待している。

### プラシャント・パルデシ (Prashant PARDESHI)

国立国語研究所言語対照研究系教授。博士(学術)(神戸大学)。神戸大学人文学研究科講師、国立国語研究所言語対照研究系准教授を経て、2011年4月より現職。

主な著書・論文: *A functional account of Marathi's voice phenomena: Passives and causatives in Marathi* (Brill, 2016), 『有対動詞の通言語的研究—日本語と諸言語の対照から見えてくるもの—』(共編著, くろしお出版, 2015), 『自動詞・他動詞の対照』(シリーズ言語対照〈外から見る日本語〉第4巻, 共編著, くろしお出版, 2010), 『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ』(講座: 認知言語学のフロンティア 第5巻, 共著, 研究社, 2009), *Toward a geotypology of EAT-expressions in languages of Asia: Visualizing areal patterns through WALS* (『言語研究』130, 2006).

受賞: 第1回「ことばと文化・教育」研究助成優秀賞(財団法人博報児童教育振興会, 2007), *The Chatterjee-Ramanujan Prize for Outstanding Student Contribution to The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000* (Sage Publications).

社会活動: 日本語学会評議員。